えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑⑦

訳鍵（やくけん）

辞典を編さん 蘭学普及

江戸幕府は外国との接触を制限し、長崎・対馬・薩摩・松前の四つの窓口に限定して交易を行った。なかでも、長崎は幕府がオランダ、中国（清）と直接貿易を行う重要な窓口として知られる。長崎ではオランダ語により西洋の学術を研究する蘭学も盛んになり、当初はオランダ通詞による語学の学習が中心であったが、次第に他の分野にも広がっていった。

多くの者が蘭学を学ぶようになると、オランダ語の辞書が求められるようになるが、流通する辞書はほとんどなかった。「訳鍵（やくけん）」は京都の蘭学者藤林普山が編さんした蘭日辞典で、1810（文化7）年に100部、後にも100部が再版されることで、蘭学の普及に貢献した。乾・坤（こん）・付録の3冊からなるが、今回紹介する本は、3冊が合冊された形で伝わっている。

「訳鍵」とは、その名のとおり「オランダ語を訳す鍵」という意味で、普山の師匠であった稲村三伯たちがフランソア・ハルマの蘭仏辞典をもとに編さんした蘭日辞典「ハルマ和解（わげ）」の簡略版として刊行された。普山が凡例で記すところによると、村の少年がたくさんオランダ語を習いに来たが、「ハルマ和解」を写させると非常に時間がかかった。そこで「ハルマ和解」から約3万語を抜き出して使わせるようにした。それを稲村三伯の許しを得て刊行されたのが「訳鍵」であった。

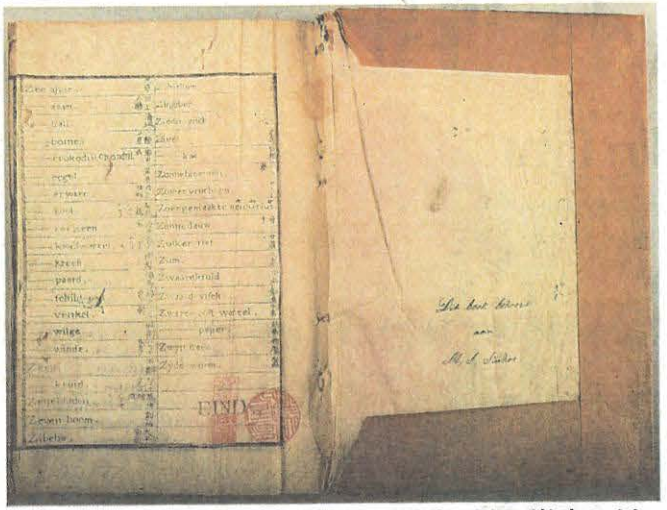
本資料については、「三瀬」と「諸淵」の両方の朱印が押されていることから、大洲の町人の家に生まれ、後に明治政府や大阪府の病院創設に尽力した三瀬諸淵（名は周三）の旧蔵本であることがわかる。

諸淵は、シーボルトの初期の門人であった叔父の蘭方医二宮敬作とともに、1856（安政3）年に長崎を訪れ、オランダ通詞の名村元義のもとでオランダ語を学んでいる。国外追放処分が解かれたシーボルトが59年に再来日すると、諸淵は最後の門人になり、父親と一緒に来日したアレクサンダーの日本語教師もつとめた。アレクサンダーは諸淵のオランダ語について、「読み書きができるだけでなく、流ちょうに話すこともできた」と書き残している。

入手時期は不明なものの、「訳鍵」には諸淵による言葉を追加した朱書が散見され、実際にオランダ語学習に用いた痕跡がある。1861（文久元）年、シーボルトが幕府から外交顧問として江戸に招かれると、諸淵もその通訳として同行している。猛勉強の上、習得したオランダ語を武器に、諸淵は激動の幕末を生きることになる。

（学芸課長・井上淳）

＜随時掲載します＞



藤林普山が編さんした蘭日辞典「訳鍵」。巻末には三瀬諸淵自筆の「この本は周三のものである」という意味のオランダ語が記されている＝1810年、県歴史文化博物館蔵

【紙面編集】宮内佑己

掲載許可番号：d20230301-04